

した。

それから漢口郊外の郭長寿で一年近く抑留生活を送り復員しました。

鯨隠密挺進隊苦心懐古録

香川県 山地 豊重

私は昭和十二年度徴集です。昭和十七年七月香川県の丸龜歩兵第十二連隊へ補充兵として応召入隊しました。約一週間で坂出港より輸送船に乗船し、上海へ上陸しました。中支派遣第十一軍鯨第四十師団歩兵第二百三十四連隊第二大隊第二機関銃中隊の要員としてです。

私が応召入隊した当時の家庭の狀態は

父 死亡（昭和十二年）

母 健在

兄 健在（未入隊）

弟 健在（未入隊）

姉 健在（二人内一人は結婚済）

妹 健在（三人）

職業は農業でしたが、私は運送業（馬車曳き）で、独身で兄も未入隊で一町歩の田を耕しており、私はあまり後顧のうれいなく入隊できました。私の同年兵はほとんど昭和十三年一月十日より五月までに入隊していたので、ぎゃくに私は当時おい目をかんにておりまた。

昭和十三年八月に第一回目の簡閲点呼があった、私はその六月に盲腸の手術をして腹膜炎にかかっていたので、点呼には本人はいかず、診断書をだしました。そんなわけで私は当時の世情から国民として応召を心待ちにしていたのです。

徴兵検査より入隊まで五、六年の間に運送の商売でもうけておりました。

鯨師団要員として上海へ上陸後、船を乗りかえて揚子江を所行し、約一週間で漢口へ着きました。昼間のみ航行し夜間は停泊する状態でした。漢口より渡船（サンパン）で武昌へ渡り、兵站で三日間過りました。さらに粵漢鉄道で鯨師団司令部のある咸寧へ到着し、ただちにトラック輸送で連隊本部の楠林橋へと進み、一泊もせず

崇陽県ハクリ橋の第二機関銃隊へ着き配属です。初年兵教育が終るとともに第二大隊は汀四橋へ移動しました。

はじめての作戦は、十七年十一月ごろ大別山作戦です。汀四橋―大冶―石灰窟をへて大別山へ。これは日本軍の飛行機が事故でおちたからそれに積んでいた機密書類の回収するのが作戦目的で、戦闘はたいしたこともなく安易な気持で十二月汀四橋へ帰りました。

昭和十八年正月にはデルタ地帯作戦に参加した。この作戦の目的は王頸哉軍を殲滅し、ついで石首華容を占領するため江北殲滅作戦と称した。この作戦では敵の軍司令官の王頸哉を捕虜にした。佐伯騎兵隊の殊勲であった。我が機関銃中隊の大隊砲関係では分隊長以下三人の戦死者を出した。払暁攻撃でした。前夜から砲をすえているのを敵は探知していたらしい。朝霧が晴れるところからまだ一発も撃たぬのに敵の迫撃砲の一発でやられました。これが私の初年兵として敵弾の洗礼を受けた最初でした。

休む間もなく十八年四月より第二次として江南殲滅作戦である。第四十師団司令部は咸寧から岳州へ移った。

連隊本部は汀四橋から石首へ大隊は藕池口へとそれぞれ移った。

十八年八月に第一次、第二次作戦の遺骨護送で第二大隊本部勤務となった。これは教官が中隊から本部の宣撫班長になって、私は教官の当番兵として本部へだ。岳州、咸寧、漢口へと移り、そのうちに内地へ帰れるかと期待したが駄目となり原隊へ帰った。

十八年九月、馬受領をして石首の連隊本部へ帰ると戸田連隊長は

「山本少尉は早く原隊復帰せよ。つぎの常德作戦の要員になっておる」

とのことで、あわてて山本教官と共に藕池口へ復帰し、十八年十一月より常德作戦に参加、西山支隊へ配属されました。

常德の東門攻撃に支隊の先遣一個中隊が払暁攻撃で城壁へとりついたのは二十〜三十人の兵力です。何しろ百五十メートルぐらいの遮蔽物のないところを援護射撃を受けつつやっとなどついた。そのさい私は東門の観音開きをくぐり三回城内へ出入りし、擲弾筒、チエコの機

関銃、水冷の機関銃の脚を分どり戦利品とした。その時の武勲は私ではなく右翼中隊の第八中隊の功績になりました。

この時、教官の山本少尉は軍刀を私にあづけ、私の小銃をじょうずに撃って敵をたおし、大活躍をされました。第七中隊の石井中尉に迫撃砲の直撃弾があたって戦死され、そのすぐそばにいた私も迫撃砲の破片を左半身に三発受けました。

(後遺症あるも目症者の傷痍軍人である)

十二月、西川中隊長室に呼ばれ、中隊長は第十一軍の戦傷徽章を私の胸に親しくつけてくれた

「山地さん。あんたの東門攻撃の働きは感状ものであるがあんたは本部勤務だから、八中隊へゆずった。早く中隊へ帰れるようにする」

といって温厚な人柄をよくあらわしながら丁寧に慰めてくれた。

やがて山本少尉は大隊副官となり、私は別れて中隊へ復帰することになった。私はその時考えて山本少尉に

「一年以上も進級なしで本部勤務をして今さら中隊へ

帰れますか」

といいました。

「それもそうじゃ」

と山本さんは考えてくれて經理の三田中尉に相談して私を中隊復帰のかわりに經理部つき農園の班長にしてくれました。

業務は一個大隊の給食係で各中隊の炊事班長のうえに立つもので、私はそのとき精勳章三本の一等兵でした。

まあこれならとしんぼうしました。

十九年四月、湘桂作戦にできました。夏の衣袴でした。部隊はすべて出動しました。第一、第三大隊は大損害を受け兵力は半減しました。第二大隊は本部護衛で損害軽微ですが、食糧弾薬の補給なし。食糧は夜の間を稲を刈って、蓮根を掘って命をつないだ。二塘ではじて敵の戦車をみた。友軍の連隊砲の速射砲が戦車をやっつけた。湘潭では初めて敵の自動小銃を見ました。白鶴舗の路傍では友軍の戦傷者のウジ虫をみました。医療機関がなかったのです。

さらに前進して花橋でつぎの作戦の準備で二十日間駐

留した。

つぎは桂林作戦です。第二天隊は七星巖を中心とした岩山の天然要塞を突破、桂林市内へ一番乗り、さらに余勢をかって柳州まで進撃した。

桂江を渡河して桂林市内を突き抜けて行くと、桂林の飛行場があり、日の丸の愛国機がたくさん戦利品としてあり、また敵の飛行機も飛んでいました。それらを尻目に見てどんどんすすみ、仏印のハノイか重慶までも行くのかと思うほどで、柳州までいきました。そこで反転命令が出て十二月までに湖南省南部の道県まで反転しました。十二月の末ごろ、經理より中隊復帰を命ぜられた。南部粵漢打通作戦要員として参加した。

(以下、村上調査員補足説明)

「この南部粵漢打通作戦における『地獄の敵中横断三百五十キロ、隠密挺進隊』こそは『作戦実施のための戦力として苦勞欠乏に耐え、かつ戦闘経験豊富なる師団』として特に認定された第四十師団の名譽ある実施部隊である。

甲挺進隊は歩兵第二百三十四連隊第一大隊

乙挺進隊は歩兵第二百三十六連隊第一大隊

丙挺進隊は歩兵第二百三十四連隊第二天隊

丁挺進隊は歩兵第二百三十五連隊第二天隊

の編成で、この勞苦調査の回答者山地氏は丙挺進隊の要員として善戦健闘、部隊はよく初期の目的を達成した。

作戦が成功裡に終了をみた桜第二十軍司令部では、二月二十八日甲、丙挺進隊と個人で三浦軍曹(丙隊所属)に軍司令官感状を授与した。」

二十年一月早々、土屋少佐の指揮する丙挺進隊は全員便衣を着て十五日分の携帯口糧と手榴弾三発(内一発は自決用)を持って壮途についた。出発にあたり戸田連隊長は、

「暗夜行軍だ。昼は歩くな。火はたくな。部隊からはずれたら東へ東へいけ。大きな川がある、そこにおれば必ず友軍がくるから」

と、將兵一人一人の手を握りながら、軍隊口調でなく平易にかんで含めるように訓示した。

「目的は新岩下の鉄橋を無傷で占領確保すべし」

である。私は第二機関銃中隊の弾薬手として従軍。

作戦行動中の辛苦のことはもう筆舌につくすことは出来ぬ。とにかく並の戦闘と異なり隠密に逃げながら進むことだ。寝ると思うな。食べると思うな。道路を歩くと思うな。ですから。ともかくよくはげましあつて成功しました。

そのあと南雄の敵の飛行場もうばいに行き成功。三南作戦へ。

最後に広東省の汕頭へ集結の予定で広東へ向かったが、先遣隊が街の中でバリバリうった。服装はこれ以上悪くしようがないぐらいまるで破れ、雑巾を身につけている程度で、こんな行儀の悪い程度の低い野蛮な部隊を広東市内へいれることは日本軍の恥というので、市の郊外で足止めされた。軍の感状に輝く鯨師団をなんとという待遇かと皆怒った。

三月より北上反轉を始め、江西省の南昌まで来て終戦を聞き、九江、安慶、蕪湖まで揚子江を下り、南京へ来て武装解除された。南京では中華門の中の雨花台で捕虜生活をした。

二十年十二月より二十一年五月までの間飛行場の建設、市内の清掃やらの使役についた。五月の二十四、五日に呉淞より米国の上陸用の舟艇で博多港へ上陸復員した。

香川県多度津町の家へは五月の末に帰り着いた。階級は精勳章五本まいた上等兵。中隊員三十七人中帰ったのは三人(軍曹、兵長、上等兵)。終戦の八月にポツダム兵長となりました。ヒゲの上等兵としてまた山地古兵として大隊本部で知られていた。

復員後はまた馬車をやり、今では自動車運送業をやっています。二十一年の十二月に二十九歳で結婚しました。

振り返ると十八年十一月の常德作戦で迫撃砲の破片で負傷して丹下左膳となり、担送患者として支那のクーリーに担架をかついでもらつて従軍した。大隊の医務室では摘出出来ず、あとで破片が体のなかをめぐつて痛く苦しみました。